

芝浦工業大学工学マネジメント研究科客員教授
谷口博昭

「道の駅」、地方創生と防災の拠点に

1854年安政東海地震の津波の折、「稲むらの火」の主人公のモデル浜口梧陵氏は、夕暮れ時であり稲むらに火を放し広川村民を高台にある八幡神社に避難誘導、多く

昨年末「世界津波の日」とする平成25年12月に「強くしなやかな国民生活の実現を図るための防災・減災等に資する国土強靱化基本法」が成立、ハードとソフトのバランスの取れた防災・減災を実施してきたところであり、浜口梧陵氏と同じノブレス・オブリージュ（貴族の義務）を感じます。

念ながら東京一極集中の傾向は止まっています。今こそ東京と地方の調和のとれた自立分散型国土形成に向け、理念を共有する「国土強靱化」と「地方創生」が連携を強化し政策効果を高める必要があります。「道の駅」が休憩、情報発信、地域の連携という3つの機能に加え防災機能が強化されてきており、地方創生の拠点としての役割も検討されています。多くの「道の駅」が「地方創生」と防災の拠点としての役割を果たすことが期待されます。

の命を救ったのみならず、その後私財をなげうって広村堤防等復興対策、地域防災に努めました。

この津波が襲った11月5日（旧暦）わが国で2011年「津波防災の日」とされたのに続き

災害列島の我が国です。津波のみならず今年の鬼怒川堤防決壊、本年4月の熊本地震、9月の北海道、東北地方の水害等々毎年のように大きな災害が続いています。このため

ているところです。

また、平成26年12月に、「地方創生」＝「まち・ひと・しごと創生」法が成立、過度の東京一極集中を解消し自立的で特色ある地域の発展を図ってきているところですが、残

り、地方創生の拠点としての役割も検討されています。多くの「道の駅」が「地方創生」と防災の拠点としての役割を果たすことが期待されます。

また、平成26年12月に、「地方創生」＝「まち・ひと・しごと創生」法が成立、過度の東京一極集中を解消し自立的で特色ある地域の発展を

果たすことが期待されます。